■主催：公益財団法人 花王 芸術・科学財団
http://www.kao-foundation.or.jp/

公開シンポジウム「これからの家族を考える」
シリーズ第1回

しがらみときずな

公益財団法人 花王 芸術・科学財団

しがらみときずな

公開シンポジウム
「これからの家族を考える」
シリーズ第１回

2016年11月28日（月）18:00〜20:00

日本橋三井ホール
（東京都中央区日本橋室町2-2-1 COREDO室町1　5F）

主催　公益財団法人 花王芸術・科学財団

目次

問題提起（p2〜p3）
「なぜ今、家族なのか？」
東京大学名誉教授　原島 博

基調講演（p4〜p9）
「宿命としての家族」
脚本家・小説家　山田 太一

パネルトーク（p10〜p24）
山田 太一 × 須磨 佳津江 × 原島 博（コーディネーター）

問題提起

「なぜ今、家族なのか？」

東京大学名誉教授
原島 博

理想的な家族とは、押しつけられるものではない

原島でございます。今日はこんなに多くの方にお集まりいただきまして、ちょっとびっくりしております。おそらくみなさん、山田太一先生がお目当てだろうと思います。早く山田先生を出せとお思いかもしれませんが、一応コーディネーターとしての役割がありますので、少しばかりおつきあいいただければと思っております。

今回選んだテーマは家族ですが、これはとんでもなく難しいテーマです。なぜ難しいのか。家族は自分で自由に選べるものではありません。子どもは親を選べませんし、親も子を選べません。そして法律的な話は別として、親子関係は解消できません。夫婦関係については、最初は選べるかもしれませんが、これとてそう簡単には解消できません。

家族には、いろいろな縛りがあります。つまり、家族はしがらみとなるのです。これは誰もが思っていることだと思います。父親には家族を養わなければならない義務があり、母親には家事と子育ての負担があります。子どもにとっては、親が有言無言の圧力になっています。そこに嫁姑問題、婿姑問題もあるかもしれません。そして老人介護問題が、今の家族には大きな負担としてのしかかっています。

一方で、人は家族に絆（きずな）を求めています。家族とは、人と人がともに生活する最小単位です。仕事から帰ってきたときの安息、あるいは団欒の場と位置づけている人もいるでしょう。もしかしたら、現代社会の中で家族は孤独を癒す場なのかもしれません。

忘れてはいけないことは、人がそれぞれ違っていていいように、家族もそれぞれ違っていていいということです。これを忘れて理想的な家族というものを考えると、おかしなことになるとわたしは思っています。理想的な家族をもつことを考えるのはいいことだと思いますが、それは決して他人に押しつけるものではないのです。

今回のこのシンポジウムも、押しつけるつもりはまったくありません。ただし「いろいろあってもいいよ」というのでは、それで終わりになってしまいます。ではなぜ、ここで改めて家族について考える必要があるのでしょうか。ひとつはやはり今、家族というものが大きく変わってきているからです。ここにはいろいろな世代の方がおられると思いますが、家族のとらえ方は世代によって異なるはずです。

家族の問題は、すべての人にとって「自分自身」の問題

戦後、都市化や工業化とともに大家族から核家族へという流れが生まれ、それに伴い、家父長制から「近代家族」へ変わってきました。「近代家族」というのは社会学の専門用語で、「両親と子を構成単位として、子育てを目的とする中で男女の役割分担が行われている」家族のことです。父親は働き、母親は家庭を守るという役割分担が、ある意味、近代の産業社会を支えてきたのではないかという点で、「近代家族」と呼ばれます。それがいいことなのか、悪いことなのかはさておき、いずれにしても家族はこのように変わってきました。

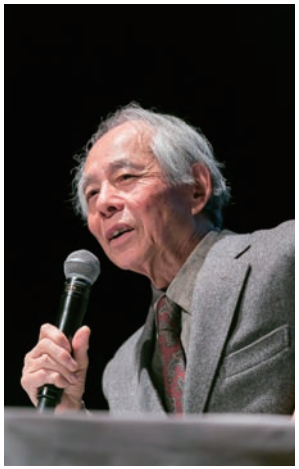
単身世帯やシングルマザーも、当然家族に含まれます。“一人”という家族もあります。これは「近代家族」の定義からいえば、厳密には異なるのかもしれませんが、わたしは“一人”の家族もあると思っています。さらに夫婦別姓、同性婚など、家族の形は現在進行形でどんどん変わっています。今は家族など必要ないという人も、少しずつ現れてきています。インターネットの世界のコミュニティで十分、子育ては家族単位ではなく共同ですればいい、子どもは遺伝子バンクやデザイナーベビーでつくるなど、そういう考え方の人もいるようです。

家族についていろいろと議論はありますが、家族の問題は、家族は不要、いらないと考える人にとっても関心事なのです。関心事だからこそ、不要という議論になるわけですね。要するに家族は、すべての人にとって“自分の問題”であるのです。そこで非常に難しいけれど、『これからの家族を考える』というテーマのシンポジウムを企画させていただきました。

今回は、山田太一先生にまずはお話しいただき、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。どうぞ山田先生のお話にご期待いただければと思います。どうもありがとうございました。

基調講演

「宿命としての家族」



脚本家・小説家
山田 太一

■選べないものの「宿命性」が、かけがえのないもの

原島先生からすべてにわたってご配慮のある前置きをいただいて、こんなに多様な前置きでは自分が何をしゃべっても外れるし、何をしゃべってもどこかでぶつかるという感じで、どうしていいかわからないような状態でお話しするわけですけれども。

はじめに家族というテーマを聞いたとき、宿命性というものに注目しました。家族は選べないと原島先生もおっしゃいましたけれども、本当に選べないんですね。病気とか顔も選べない。こういうのは家族のせいではないかもしれないけれど、回り回れば、家族のせいともいえるわけですよね。親のせいともいえる。病気もね。こういう、選べないものの宿命性みたいなものが、実はわたしたちにとってはかけがえのないもので、これがみんな選べたら混乱してしまいますよね。選べないことが前提にあるから、その中でわたしたちは自分を確立できると、そう思います。ですから、宿命性を前提として、どういうふうに生きていくかという話になるのではないかなと思って「宿命としての家族」ということを申し上げました。

顔が選べないことについては、原島先生が以前のシンポジウムでテーマになさっていて、それがとても面白かったのです。同じ人でも、幼年期、青年期、中年期、そして老年期で、顔がどんどん変わっていくわけですね。それはすべて宿命性によるのではなくて、人生をどう生きたかということが、顔に反映してくるわけですね。

広い話をしますと、2300年ぐらい前に縄文時代から弥生時代に変わりました。けれども、それは瞬間的に変わったわけではなく、だんだんと縄文から脱していくようだったと先生は語っていらっしゃる。一時代の中での変化はもちろんあるけれども、平安時代とか昭和時代とか、顔はそれぞれの時代ごとに変化しているそうなのです。人間はいろいろなものを背負って生きているんだなと思いました。

選べないといえば、わたしは身長が160cmちょっとしかないんです。今は縮んでいるから、もっと小さいかもしれません。なにしろ戦争中の食べ物のない時代が成長期だったので、栄養失調でした。子ども時代から大学へ入る頃までは、食べ物がなかったんですね。

■それぞれの家族は、ぞれぞれの現実に即して生きている

子どもの頃、わたしの家族は浅草六区で小さな大衆食堂をやっていました。当時は、住み込みで奉公している小僧さんたちが、年に1回か2回、休暇を取って実家に帰る「藪入り」という風習がありまして、彼らが「お金を握りしめて」浅草へ遊びに来るんですね。でも、一流の店には入りにくい。そんな彼らにとって、うちは「ちょっと安そうだな」と思って入れる店でした。

狭い店でしたが、従業員がそんなに必要なのかと思うほどたくさんいて、父も母もすごく忙しかった。わたしはそのような環境で育ちましたから、食事といえば、店のメニューを食べていたのです。ですから家庭料理というものを知らなかった。

戦争が始まると、下町には空襲の際の避難場所がなかったため、うちがあった何丁目だかの広い区画を取り壊して避難場所にすることになりました。国の命令ですから聞かねばならず、引っ越す必要に迫られたのです。その頃は食糧難で食堂どころではなくなっていましたから、食堂をたたみ、地方へ疎開をしたのです。そのあと、疲労で母が亡くなり、二人の兄も肺結核で亡くなり、小学生のわたしと10歳上の姉、それから妹、そして父が残されました。姉が母親代わりになったのですが、そのとき彼女は、ご飯を作ることを知らなかったことに非常にショックを受けたみたいです。それまでは店のメニューを勝手に選んで、今日はコロッケ、明日は親

子丼、みたいに食べていたので、食事の作り方を知らなかったんですね。ですから家族というのは、育ちによって相当違うと思います。今、いろいろなご家族に話を伺うと、サラリーマンの家族には普遍性があるみたいですが、わたしの家みたいな特殊な育ちというのは、ほかの家族のあり方と符合するところがほとんどないほど、家族というのはいろいろで、それぞれの家族の現実に即して生きていたんですね。

家族に関して、わたしには子どもの頃の強烈な思い出で、今でも悪夢のように覚えていることがあります。母が亡くなったあと、ちょっと遠い親戚のおばさんの家に使いに行くことがあったんです。巣鴨のとげぬき地蔵の近くにある家でした。その家は親戚の中では出来のいい家というか、お父さんが役人か何かで、息子さんが旧制の中学に行っていて、とても輝かしいキャリアみたいに、ぼくには思えました。その家にはお嫁さんとお姑さんがいたんですが、たまたま使いに行ったとき、お姑さんがお嫁さんに対してすごく怒っていたんです。竹の物差しがありますね、あれでお姑さんがお嫁さんをひどく叩いている。お嫁さんは「ごめんなさい、ごめんなさい」と平身低頭で謝っているのですが、お姑さんは「許せない」といって、ものすごく叩いている。なぜそんなに怒っていたのかはわかりませんでしたが、家庭でのお嫁さんの地位はもっと上だと思っていたぼくは、呆然としてしまいました。口が利けなくて震えているぼくの目の前で、いつまでも叩いているんですね。

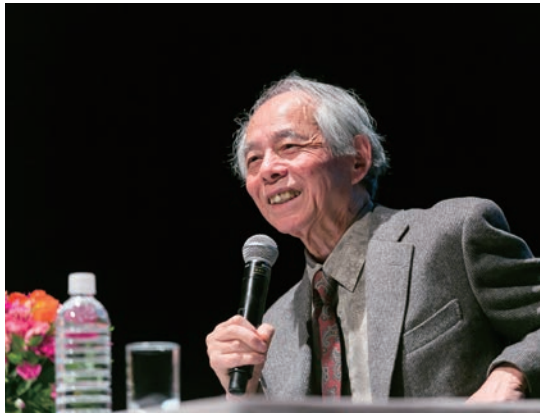
わたしの家は父と母と兄弟だけで、父母の上はいなかったものですから、上下関係がそういう家は見たことがなく、こんな家があるのか、すごいなと思いました。旧制中学に通っている息子さんは非常に知性のある人だったのに、自分のお母さんを叩いているお姑さんに対して、なぜ抗議をしないのか、ものすごく悔しいというか、そういう思いがずっと頭の中にありましたね。そのときは、その家ではお姑さんが君臨していたのでしょうが、今はむしろ逆に、お嫁さんのほうが君臨しているようです。そのように、家族というのは進化していきますね。その点において、家族は変わっていくほうがいいと思いました。お姑さんがそんなに威張っていることに、子どもながらにおかしいと思いましたから。

■ドラマに込めた「結婚なんかするなよ」というメッセージ

それから何十年かたった頃、ぼくはもう一度、「こんなことがあっていいのだろうか」と憤慨したことがあります。35年ぐらい前ですから、ぼくは40代の後半で、もうライターになっていました。みなさんの中にも覚えている方がいらっしゃると思いますが、当時、「女とクリスマスケーキは25を過ぎると売れなくなる」というギャグがありました。ちょうど自分の二人の娘が20歳前後だったので、なんてことをいうんだと、ものすごく腹が立ちましたね。みんながそれを、笑いの種にしていたんですよ。今考えるとすごくおかしいでしょう。うちの娘も、あと2年か3年たつと売れ残りか。「だったら結婚なんかするなよ」というメッセージを込めて、『想い出づくり』というドラマを書きました。女性は結婚したら子どもを産んで、それからがまた大変ですから、結婚する前に一生残るいい思い出をつくろうという内容のドラマです。女性が25歳、26歳になる前に思い出をつくろうと努力するのは、何か悲しいですが、ぼくはその頃、非常にリアルに結婚が圧迫だ、と感じたんですね。

今では、先ほど申し上げた嫁と姑の地位は変わっていますし、婚期についても25歳や26歳が売れ残りだという感覚はなくなっています。世の中が動くのと一緒に“家族”も流動的ですね。とすると、“家族というものの宿命性”と簡単に言ってはいけないのかな、とも思います。むしろ“一人の人間としてのそれぞれの宿命性”と言うべきなのかもしれません。

今は容姿も整形などで変えたりできるし、25歳や26歳で婚期が終わるという圧迫もありません。ですからぼくは、昔は今よりも少し厄介な時代だったと思っていたのです。ところが最近、『想い出づくり』の脚本を本にして出そうという若い人たちが現れまして、今は昔よりいいだろうというぼくに対して、彼らは「全然よくなっていない」と言うんですね。確かに、25歳や26歳で結婚しなければという圧迫はないが、決してよくなっていないと。昔はまわりがお膳立てしてくれたけれど、現在は自主性に任されすぎというか、すべてその人の責任になるみたいなところもあるんでしょうね。結婚が難物であることについては、現代のほうが悪いかもしれないと言う人もいて、「あの頃はひどかったね」という話じゃないんですね。家族は変化しているけれども、あの頃の嫁姑問題が解決して、婚期についても解決して、どんどんよくなっていくように思いたいけれど、理屈上は女性を解放するはずの自由からは新しい重荷が生まれているというんです。議論上は見過ごされていることがあとに残っていく。人生の問題はそんなに簡単に解決することじゃないんだと、改めて感じました。



必要なのは「自分は一人なのだ」と覚悟すること

現在の家族に関していちばん大きい問題は、原島先生もおっしゃっていましたが、高齢化でしょう。今は、長生きすることがいいことだとは言えなくなってきましたね。わたしもその高齢化の一人です。最近はお葬式はもちろん、知人が入所する高齢者施設を訪ねることも多くなりました。そうすると、「死にたい」と言う人がけっこういるんですよね。もう、どうしたらいいかわかりません。「そんなこと言わないで元気でいろよ」なんて、言えませんでしょ。「うーんそうか、ぼくも死にたいよ」ぐらいしか返す言葉がないのです。実際、家族でこういう問題を抱えている方はほんとうに大変だと思います。

『愛、アムール』という、老夫婦を主人公にしたフランス映画がありますが、この映画では病気で苦しむ奥さんが「わたしを殺して」と夫に頼む。そう言われても、殺したら殺人者になってしまうので殺せない。でも死に対する妻の欲求はとても強くなっていくので、とうとう最後には、妻の顔に枕を押しつけて殺してしまうのです。そこで場面が変わり、家に踏み込んだ警察が自殺している夫を見つけるというラストなんですが、これなど映画だからできるけれど、実際自分がそんな状況に置かれたら、どうしたらいいかわかりませんね。

高齢のお母様がいる友人のところに、お見舞いに行ったときのことです。ちょうどお母様がデイサービスに行っているというので、雑談をしていたら帰ってきました。デイサービスのスタッフに体を支えられて玄関まで送り届けてもらったら、そこでスタッフは帰っちゃうんですよ。その後は家族に任せることになっているんですね。ぼくが手助けをしようと思ったら、家族の人が「やめてください」と。こういうところで妥協するとどんどん甘えるし、這って自分の部屋まで行くのはお母さん本人の希望だから、手助けしないでほしいと言うんですね。でもね、歩けないんですよ。ハッ、ハッて辛そうに這いながらわたしに「ああ、よく来てくれたね」って。

そんな姿を家族たちは見ているだけなんですね。なんだか、ものすごいリアリズムというか、現実を目の当たりにしたように思いました。確かにいちいち手助けをしていたら、手伝うほうも、助けられるほうも、くたびれてしまう。変な親切心で手伝わないというのは、介護される側も了解のうえなんですよね。家族の問題は、こういうところまできているんだと思いました。

家族にとって、介護は負担です。なかには「こんなことをしていたら壊れてしまう」「放り出したい」と思っている家族もいるかもしれません。でも介護問題は、家族と切り離して考えることはできません。ですから一歩踏み込んで、人は結局は一人で生きていく、そして一人で死んでいくんだということを覚悟しないといけませんね。覚悟できないという方も、もちろんいらっしゃるけれども。

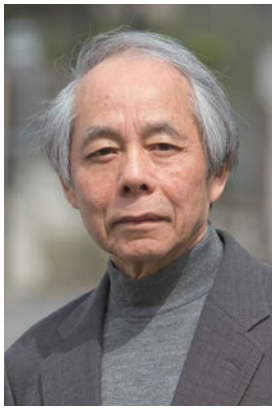
いろいろなものに刃を突きつける「家族のリアリズム」

今のように、これほど老人が増えた時代はありませんよね。今までは、老人が「ほどよく死んでくれていた」わけで、わたし自身も「ほどよく死ね」と思われているかもしれませんが、「ああそうですか、ではほどよく死のう」と思っても、すぐには死ねませんものね。そういう中でどうやって生きていくかが、老年の難問にして知恵のしぼりどころだとは思います。

たとえば、定年後に女房と旅行することを楽しみにしていた人も、そういうチャンスが何度もあると飽きてしまう。船で外国をクルーズしながら老後を過ごす人もいるけれど、3日も4日も波しか見えなかったり、クルーズのメンバーの中でイヤな人を仲間外れにしたり、そういう話を聞くと、どこまで人生を楽しんでいるのかなと思ってしまう。

ぼく自身も含めて、本当に幸福なんだろうかと問いかけてみると、だんだん老後に対しては厳しくならざるをえない。リアルになっていかざるをえないんですね。今はまだ幻想などに頼ったりしてごまかすことはできるけれども、だんだんごまかしが利かなくなるという恐怖のようなものを感じます。

老後の話にしぼりすぎたかもしれませんが、老後にどう生きていくかということに対しては、いずれ答えが出てくるのでしょう。ぼくにはまだ見えていませんけれども、すでに答えを出している人もいっぱいいると思います。今、家族の問題を考えると、現実というかリアリズムが、非常にいろいろなものに刃を突きつけているように思っています。



山田 太一（脚本家・小説家）
1934年東京浅草生まれ。早稲田大学卒業後、松竹入社。主に木下恵介監督の下で助監督を務める。木下監督企画のテレビドラマ「3人家族」で初めて脚本を執筆し、高視聴率を獲得。その後独立し、「男たちの旅路」（1976年）「岸辺のアルバム」（1977年）大河ドラマ「獅子の時代」（1980年）「早春スケッチブック」（1983年）「日本の面影」（1984年）など数々の傑作ドラマを手がける。ドラマ脚本の他、1983年には戯曲「ラブ」を初めて執筆。その後「砂の上のダンス」「黄金色の夕暮」など舞台の脚本も多数手がける。1988年には小説「異人たちとの夏」で山本周五郎賞を受賞。近年では、「山田太一ドラマスペシャル」として、数々のスペシャルドラマ作品を発表。2016年11月には東日本大震災から5年後の人々を描いた「五年目のひとり」が放送され話題となった。

パネルトーク

山田 太一 × 須磨 佳津江 × 原島 博(コーディネーター)

■『パパは何でも知っている』が理想の家族像だった

原島　それではパネルトークに移らせていただきます。山田先生、ありがとうございました。素晴らしかったですね。わたしはこの花王財団のシンポジウムでコーディネーターをすることをいつも楽しみにしていまして、それはなぜかと言いますと、いい出会いがあるからです。何しろ、一緒に話したい人を選べます。今日は須磨佳津江さんにもいらしていただきました。男二人で家族について話していると、絶対におかしな方向に行ってしまうでしょうから、須磨さんにはその方向を正していただきたいと思っています。ご存じの方も多いと思いますけれども、須磨さんは「趣味の園芸」の司会を長くやってこられ、ご自身も園芸を趣味にしておられるとか。それから「ラジオ深夜便」でもおなじみです。

須磨　夜 11 時 15 分から朝 5 時まで生放送しております。毎日ではないですよ。

原島　須磨さんの声にしびれていらっしゃる方も多いと思います。さて、今回どういう形で進めるかについては、まずは山田太一先生のお話を伺ってからということで、実はまったく決めておりません。打ち合わせもあまりしていないので、どうなるかわかりませんが、どうなるかわからないというのは、それだけ家族というテーマが複雑だということだと思います。まずは須磨さんから、ご自身の体験でも、山田先生のお話を伺ってということでもけっこうですので、少しお話しいただけないでしょうか。

須磨　わたしは山田太一先生のドラマが大好きで、太一先生のドラマだと「見なきゃ！」と気合いが入る視聴者の一人です。家族、人はどうしたら幸せになるかということをドラマで上手に表現され、また、なんともいえないごく普通の日常を、よくあれだけ感動的に描けるものだといつも感心しながら見ていました。それは先生の生い立ちに加え、常にまわりを見て、不思議だと思うことは不思議だと思い、それを全部自分の中に溜め込んで、家族とは何か、人生とは何かを問い、人はもっと幸せにならなきゃいけないと思いながら生きてこられたからなのかなと、お話を聞きながら思っていました。幸せになるためにはどういう家族をつくるかということと、家族の中で自分はどういう立ち位置にいたらいいのかということを、常に考えていらしたのかなという気がします。

自分の人生でいうと、やっぱり家族というのは、「しがらみときずな」というタイトルにありますように、常に表裏一体だと思います。絆という言葉が世の中で多く言われるようになったのは、東日本大震災のときですね。放送でもずいぶんその言葉を使いました。人は何かあると、突然身のまわりのことを見始めて、家族は大事だと気づく。そこで、絆という言葉が出てきた。テレビで若い子たちへのインタビューを見ていても「家族のことなんか考えたこともなかったけど、震災を経てすごく家族と一緒にいたいと思いました」とか「大事な人とはともに時間を過ごしたいと思いました」という答えが多くありました。時間が限られると真剣に物事を考えるようになり、大事な人を大事だと思うという原点に戻るのかなと、感じました。

わたし自身は、自分がどんな家族をいいと思っているのか、正直言うとよくわかりません。小さいとき、『パパは何でも知っている』というアメリカのドラマがすごく人気がありました。わたしの父はあまりしゃべらず、威厳を保たなければ父ではないと考えていた人だと思います。ちゃぶ台返しもしましたし。亡くなったあとで話を聞くと、おちゃめな人だったらしいのに、

どうも家族の中では「父」という役割を演じていたようなんですね。それは大変だったんじゃないかと思いました。では、そういう父が大好きだったかというと、そうではなくて、『パパは何でも知っている』に出てくるような、娘を抱きしめて「かわいいね」と言ってくれて、フランクで優しくてなんでも教えてくれて、いつもニコニコしている父親だったらどんなにいいだろうと、常に思っていました。今思えば、人はないものねだりをするんでしょうね。

では、今の自分が理想の家庭を築いているかというと、実はそれについてはあまり考えたことはありません。ただ人を好きになり、一緒に住もうと思って結婚しました。子どもができて理想の母になれているかというと、それもよくわからないのです。ただ、『パパは何でも知っている』の影響かもしれませんが、わが家族は友達夫婦、友達家族みたいな傾向があるのかな、と思います。威厳のある父でもないし、なんでもできる母でもない。でもそれなりに家庭を築き、姑の世話をしたり、その中でさまざまな葛藤を経ながら生活しています。先ほど父が「役割を演じていた」と申し上げましたが、役割があるというのは大変だけど幸せで、それが家族なんだという気がしています。

■「最後は一人」。その思いが家族への感謝につながる

原島　ありがとうございました。旦那さんと友達で、友達家族ですか。うらやましいです。確かに「絆」という言葉が、東日本大震災から重要なキーワードになりましたね。今回の「しがらみときずな」というタイトルは、「しがらみ」と「きずな」が対立するだろうと思ってつけたんです。ところが、絆の語源についてある人が言うには、「きずな」の「ずな」は「綱」だそうです。「き」については諸説あるようですが、ひとつは騎兵隊などの「騎」、つまり「馬」ですね。要するに「馬をつないでおく」が絆の語源だと。あるいは「引き綱」が語源だという人もいるそうです。いずれにしても絆とは「逃げないようにする」ことらしい。そうすると、しがらみとほとんど同じ意味になるんですね。でも絆というのは、そんなに簡単な話ではないわけですよね。「つながり」をどう解釈するかの問題であって、同じことをしがらみだと思う人もいれば、しがらみに近い絆、あるいは本当の意味でのつながりと思う人もいるかもしれない。

しかし一方で、「しがらみとしての家族」にずっと悩まされてきたという方もおられると思うのです。家族の問題を考えるには、そこにもきちんと目を向けなければいけない。ぼくは須磨さんより年齢ははるかに上ですが、やはり『パパは何でも知っている』『うちのママは世界一』の世代です。あのドラマを見ていた人たちはみんな、やはり家族はこうあってほしいという憧れをもっていたのでしょうか。

須磨　理想の家族がドラマになっているような、本当はそうじゃないのに、そういう家族がきっとあるに違いないという、幻想をもたされた気がします。

原島　やがてそれが幻想であると知ることになるんだけれど、一方で、やはりわれわれは、そんな幻想をいつももっているんですよね。

須磨　まわりにそういう理想像があるんだ、そうでなければいけないんだという外部圧力のようなものが、家族にはありませんか？

原島　あります、あります。そうあるべきというね。

須磨　「あなた妻でしょ」「あなた母でしょ」とか、ありますよね。それが、しがらみにつながるのかなという気がします。

原島　つながっているし、それが山田先生の言葉でいえば「宿命」ということになるんだと思います。山田先生は、幸せとは何かを考えながらドラマをお書きになっているという話が出ましたが、どうも結果的には、幸せになれない、そう簡単じゃないよ、というドラマになっているとぼくには思えるんですが、どうなんでしょうか。やっぱりそこで理想を追い求めていらっしゃるのでしょうか。

山田　ある時期、非常に幸福に近かったという家族だってあると思います。けれど、この歳になって考えると、究極的には、人は一人で死ぬということを意識し、覚悟を決めていないと、悲しみが深くなってしまう気がします。自分の生を、一人でどのように引き受けて死ぬのかということですね。もちろん、助けてくれる人がいればうれしいけれど、人間は結局一人。生き方をどう選ぶかについても、他人ではなく自分で決めなければならない。家族がテーマなのに、「最後には一人なんだ」と言うと白けちゃうでしょうけれど。人の役に立てたり、誰かを幸福にできればうれしいけれど、老齢になると、そうしたい人がまわりにいなくなることが多いんですね。一緒に仕事をした人たちが、どんどん亡くなっていく。自分は出遅れているみたいに感じます。最後は一人なんだとしても、幸福だと思えば思えるし、たとえ幸福だと思えなくても、それもいいだろうと。結局、最後は「なんでも来い」ですよね。

原島　山田先生はある年齢になってからそのようにお考になったということですが、自分一人でというのは、「自立する」ということですよね。それは、家族にとっても大切なことなのではないかという気がします。家族はいて当たり前、自分の面倒は見てくれて当たり前、つながっていて当たり前ではなくて、基本的に一人。そう思うからこそ、家族と一緒にいると感謝の気持ちが出てきますよね。

山田　そうですね。それは心のあり方としては見事だと思います。「人は一人だぞ、一人だぞ」と言い聞かせていないと、どうも甘えてしまいますからね。

須磨　でもやはり甘えたい場所がほしいから、家族を大事にしたいのではないかという気もします。誰でもどこかでちょっと鎧を脱いでホッとして、小さなわがままを言っても受け入れてくれる人を求めているから、家族をつくりたがるのだろうという気もするんですね。お二人は甘えん坊ではないんですか？

原島　相手に何を求めるかということに関しては、こんな話があるんです。結婚したての頃は、自分をよく見てほしいという気持ちがあるみたいですね。ところが徐々に、ありのままを見てほしいという気持ちに変わっていく。相手に対して自分をよく見せるのは疲れるんですよ。

須磨　確かにおっしゃるとおりですね。

原島　家族には、「疲れない」というのが重要でしょう。いつも背伸びしていなければならないのは、疲れる。個人的なことを言うと、ぼくも、背伸びをしなくても一緒にやっていけそうな人と結婚したという気がするんですね。もっともっと理想の女性はいたような気がしますが。

須磨　そうなんですか？

原島　疲れるんですよ。やはり、こっちがよく見せなきゃいけないでしょ。それはやはり大変で、家族にとっては「安心できる」ということが重要だと思ったんでしょうね。でも、男性には意外に多いかもしれませんよ。「理想の人は取っておく」という（笑）。

須磨　先生は、ずいぶん論理的に結婚されているんですね（笑）。

原島　いや、「この人と話していると安心できる」というのがいちばんの理由だったのかなと。それが家族となる条件だったんだと思いますね。

■どう生きようと、悩ましいことは必ずある

須磨　たとえば子どもに関して、何にいちばん感動するかというと、親を疑わないで走り込んでくることですね。それを、こちらが抱きとめる。そのとき、子どもが「この人は絶対に受け止めてくれるんだ」という安心感をもっていることを、感じさせてくれるんですね。それはやはり家族の基本だと思います。親が抱きしめてくれないかもしれないと思ったら、子どもは走り込んでこないじゃないですか。だから、それが原点なんじゃないかという気がするのです。ただ、それが続かないというのがあるんですけれどね。

山田　うん、続かない。今おっしゃったとおりですね。子どもがまったく警戒せず、一目散に父親のぼくに向かって飛びついてきたときは、本当に感動しました。だけどそれが続かない。続かないのもわかるし、いつまでもそんな状態だったら困る。子どもは親に少しの幸福をくれるけれど、それをずっとくれると思っちゃいけないんだ、ということですね。

原島　家族どうし、互いにうまくやっていくには、距離を考えることも必要かもしれないですね。いつも同じ距離ではなくて、近づくこともあれば離れることもあるという、それが非常に重要なことのような気がします。そのときの状況に応じて、近づいたり離れたり。家族のつきあいというのは長いから、うまく距離をとらないといけない気がします。

須磨　近づいたり離れたりですか？　女性には、あまりそういう感覚はないかもしれないですね。

原島　男性にとっては必須なんですよ。なぜなら、定年になったときに危機が来るのです。それまで離れていた夫婦が、急に一緒にいることになる。そのときが危ない。ぼくの先輩の大学教授は、毎朝弁当を作ってもらって２階の書斎にこもり、夕方まで下りてこないそうですが、そのおかげで家族はうまく回っているようです。夫が仕事をしている時代から、夫と妻それぞれに生活があるわけですよね。それはお互いに尊重しなければならないので、定年を迎えたからといって、いつも一緒にいるということではないのかもしれないですね。

須磨　先ほど山田先生が、定年後に夫婦で旅行に行っても飽きるとおっしゃいましたね。でも飽きる以前に、定年を迎えた夫が妻と一緒に旅行に行きたがるのに、妻がすべて拒否するという例をたくさん知っています。それは、どういうことなんだろうと思うのですが。

原島　女性は女性どうしで一緒に行きたがりますよね。

須磨　女性どうしだと気楽だということなんでしょうね。

原島　旦那と一緒だと、旅行に行っても面倒を見なきゃいけないんですよね。別荘は絶対に持たないという女性も多いと聞きますね。別荘にいても、料理を作るのも掃除をするのも結局は自分だから、ふだんと何も変わらないからだと。

須磨　夫が妻に、いろいろなことを要求するからだと思いますよ。「やってあげよう」じゃなくて「やっ

てもらいたい」というスタンスだと、そうなりますよね。家族は求め合うものでしょうけれど、それがいびつになると、うまくいかなくなる気がします。

山田　ぼくも日常生活のことで「あなた、そんなこともできないの？」「普通の男の人はちゃんとやってるわよ」とか、よく言われますよ。ドライバーの使い方が下手だとか、「こんなこと業者に頼まないで、あなたがやってくれればいいのに、あなたは不器用だから頼まなきゃならない」なんて。でも、実際にその通りなんですよ。ぼくの職業には定年はないけれども、実際にはいつも定年後みたいなんですね。だから、定年後、男が家庭内でいちばんダメになる時期が、ぼくには日常。ぼくがスープを作っても「何これ？」と言われます。家事は女房のほうがうまいです。ずっとやってきたんだから、うまいのは当たり前でしょう。ぼくだってずっとやっていることは、うまいですよ。まあ、そんなことは言えませんけどね。

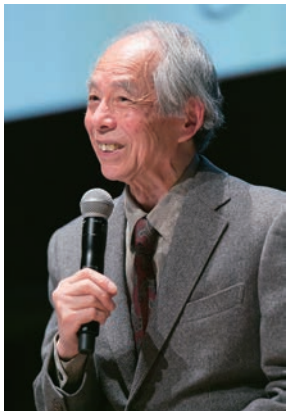
須磨　なんだか夫婦論になっていますね（笑）。

原島　夫婦論になると、たいていは男性の立場が悪くなるので、話題を変えましょう。先ほど、家族は進化しているというお話がありました。確かに昔の嫁姑の関係や、家父長制における女性の苦労という点では、昔に比べるとよくなったでしょう。では一方で、昔はそんなに悲惨だったのかというと、ある意味ではよかったし、女性としても生きがいがあったとは思うのです。これは考え方次第ですね。

1965年頃に、それまで一般的だった見合い結婚よりも、恋愛結婚のほうが多くなりました。なぜそんなことを知っているのかというと、ぼくは「恋愛と結婚とセックスは三位一体か」という講演をしたことがあって、そのときにいろいろ調べたからです。恋愛結婚が増えたのは、「結婚は恋愛のゴールだ」という考え方が強くなってきたからで、これは「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」と言われています。

一方で、女性は大変になりました。つまり結婚に関して、それまではまわりが面倒を見てくれたことを、すべて自分で決めなければならなくなったのですから。結果的にそれが、現在の晩婚化に結びついたのかもしれないという気もします。もちろん、結婚よりも仕事に面白さややりがいを感じている女性も多いかもしれませんが。でも女性が大変になった半面、「婚活」という素晴らしい言葉が誕生しました。「わたし婚活してるの」と言われると、なんだか自由な感じがするでしょう。そういう言葉が生まれてきて、少しずつ変わってきているとは思いますが、ただ、「自由」というのは本当に幸せなのかというと、それはまた別の問題で、考えさせられますね。

須磨　女性の立場から言いますと、「不自由」というのは、選べないということなんでしょうね。昔は「結婚しないと生きていけない」という、半ば強制のような、諦めに近い理由でお見合いをすることも多かったと思います。そして、相手を一生懸命幸せにしようとする。それはある意味、結婚することにあたって余計なことで悩まないで済むことではあるけれど、悩まないで幸せかというと、そうとは言えない気もします。



山田　「不自由」、つまりマイナスの事柄を避けて生きようとすることが間違いなんじゃないかな。どう生きようと、悩ましいことは必ずあるでしょう。みんなそれぞれマイナスを背負っているわけですよね。プラスばかりの要望なんてないんですよ。以前、原島先生がやられた「顔と文化」というシンポジウムで、仏像はいい顔をしていらっしゃるけれど、あの顔をした人がそばにいたら、あまりうれしくないという話がありましたね。

原島　仏像の顔は、仏像として見るといい顔なのであって、必ずしも人間の顔としての理想ではないのです。

山田　ですから、いい顔した仏像、つまりプラスだけでは気味悪いのに、プラスをみんな求めすぎている。それも理性的に求めすぎている。でもわれわれは、理性だけで生きてはいないでしょう。情や、好き嫌いにも左右される。それを踏まえて「最良の選択なんてないんだ」「マイナスが多くなるのも人生の味」というとらえ方ができるようになっていくのが、成熟だと思いますけれどね。

原島　顔は好き嫌いは別として、一生つきあっていくものです。もちろん、美容整形で変えることはできますが、基本的には自分の顔とはつきあっていかなければいけない。宿命としての

家族ではないけれど、宿命としての顔ですよね。顔を見つめるということは自分を見つめることなのですが、いいところ、悪いところ、両方ちゃんと見つめなければいけない。同じように家族というのも、両方を見つめるものなんですよね。

山田　欠点のない配偶者なんて、いないですからね。でもなんか、まるでいるかのごとくに、非難もされますけれども（笑）。

■家族は求め合う。ただし求める前に、まず相手に与えよ

原島　先ほど、理想の家族という話が出ましたが、たとえ理想の家族であっても、急に変わりうるものですよね。ある日突然、相手の浮気が判明したり、家族が急に亡くなったり。それで家族というのは変わる。理想だと思っていればいるだけ、反動はすごいでしょう。理想がずっと続くことはなく、変わるということが前提に、家族があるんだということですね。

須磨　ラジオ番組で「連れ合いを亡くして笑うこともできなかったけれど、深夜便を聞くようになって心がほぐれました」というお便りをいただくことが、けっこうあるのです。わたしのよく存じ上げている女性は、ご主人とはけんかばかりしていたのに、ご主人が亡くなったあとは、のろけ話ばかり。80代の女性で、ご主人を亡くしてから15年ぐらいたつのですが、「いまだに悲しみが癒えないの」と言うんですよ。結局、理想を求め合うからけんかをするわけで、求め合うのも愛なんだろうと思いましたね。つまり家族には、どんな状況であっても、やはり「この人とともにいたい」という思いがあるんでしょうね。

山田　亡くなってからつくった、幻想の夫像なのかも。

須磨　幻想ですか。ドキッ。

山田　そういうこともあると思いますよね。マイナスの面が消えて、いいところだけを覚えているという。

須磨　美化しているわけですね。

山田　“愛するに便利”なところというか、どういうふうにでもいじくれるわけですから。

原島　人間やっぱり美化して、それを信じたほうが幸せですからね。

須磨　そういうときにいつも思うのですが、思い出に浸るということは、やはり人はみんな相手を求めているということですよね。ですから、たとえ悪口を言ったとしても、それは「よりよくなってほしいのよ、あなた」という悲鳴であって、決して本当の悪口ではない気がするのです。

原島　基本的には求めていると思うけれど、求めるときに気をつけなければいけないのは、「自分は求めているのに相手は応じてくれない」などと思うこと。求める気持ちが強いほど、相手にじかに求めちゃうんです。

須磨　それはやっぱり問題なんでしょうね。

原島　求めたいんだったら、まずは自分から提供しないといけませんね。

須磨　本当は、そうですよね。でも難しいのは、何かを求めてそれが満たされると、さらなる求めが出ちゃうということですね。それは自分の中にもあると思うのですが、人間みんながもっている問題ですよね。

原島　それは人間の性（さが）ですよね。性というか、業というか。

須磨　ですから、家族も求め始めるとキリがないのかな、という気がします。

原島　キリがない。キリがないから、いつも不満ばかりということになります。

須磨　それは不幸ということですか？

原島　逆に言うと、そうでしょうね。やはり求めるよりは感謝するほうが、幸せになるのではないでしょうか。「ぼくと結婚してくれてありがとう」「いつもよくしてくれてありがとう」と感謝する。

須磨　そういうことを奥さまにおっしゃっているんですか？

原島　相手は「口だけだ」と言いますけど。

須磨　でも、実際に口にするのはとっても大事ですよね。「またぁ」って言いながら、相手は絶対にうれしいですものね。

原島　これは毎日言っていれば、恥ずかしくはないですよ。

須磨　毎日おっしゃるんですか？　素晴らしい。

原島　むしろ、時々言うほうがまずいんです。時々言うと「何かあったの？」と勘ぐられますから。たとえば「ごちそうさま」というのは、ご馳走でなくても言いますよね。「ごちそうさま」というのは、それを作ってくれた人に対する思いやりなんですよ。それと同じように、ちょっ

と恥ずかしいかもしれないけれど、「今日はきれいだね」とか。顔は、褒められると美しくなりますから。その反対の言葉を毎日言っていたら、本当にそうなってしまいますよ。

須磨　絶対そう思います。奥さまは、夫である先生のことを同じように褒めてくださるんですか？

原島　褒めてくれますよ。

須磨　それは理想的ですね。いつ頃からそうなったんですか？　なんだかわたし、質問者になっていますけれど。

原島　だから、今日はやりにくいんです。須磨さんは司会のプロですから。どこかで立場が逆転するんじゃないかと、ヒヤヒヤしていたんですよ。

須磨　女性として興味があるんですよ。女性は聞きたいですよね、いつ頃からかって。何かきっかけがあったのかとか。

原島　きっかけはないですね。きっかけなんかあったら、それこそまずいです（笑）。

須磨　結婚して以来ずっとですか？

原島　ぼくはわりと、気楽にそういうことを言ってしまうんですよ。だから相手から「心がこもってない」と盛んに言われます。

須磨　でも、悪口を言うよりよっぽどいいですものね。

■家族の問題と、日本社会の変革はリンクする

原島　それで、別の話になるんですが、先ほど山田先生が、ご両親が浅草で食堂を経営なさっていて、食事はメニューの中から選んでいたとおっしゃいましたね。

山田　ええ、大衆食堂でしたから、メニューの種類はいろいろありました。キャベツなんかも山のように刻んであって、それを自由に取って従業員のところに行き、「メンチカツ１枚」とか注文して。ですからぼくも、献立というのを知らなかったですね。疎開してから母と兄が死んで、姉もちょうど家を出ていた時代に、妹と二人分の弁当を作ったことがあるんですけど、おかずの作り方がわからないんですよ。だから家の前の佃煮屋さんで、毎朝15円分の佃煮を買って、妹に半分、自分に半分、それだけのおかずで学校に通っていました。でも当時はみんな飢えていた時代だから、学校に行くまでの間に、いくつかの“関門”があるんです。先輩たちが待ち構えているんですよ。つかまると脇へ連れていかれて、弁当をとられちゃう。目の前で飯を食われるというのは絶望以外の何ものでもなく、こっちもなんとか食われないように、そのような関門が現れるたびに、見つからないように走り抜けるという、それはひどい時代でしたね。中学に上がると給食が出るようになったので、そのようなことはなくなりましたが。

原島　山田先生には、家族で一緒に食事をするという生活はなかったんですか？　昔ですと、父親がいちばん偉いお誕生日席に座り、まわりに家族がいて一緒に食事をするというのが、家族の象徴というか、ひとつのスタイルとしてありましたよね。

山田　食堂をたたんで、父とぼくと妹だけの時代には、三人で食べることはよくありました。でも、父親もメニューをよく知らなくてね。材料がない時代だったということもあったでしょうけれど、よくカレーを食べていましたね。

原島　なぜその質問をしたかと言いますと、家族というのは、食事を一緒にすることによって成り立っているのではないかと思うことがあるのです。ほかのことを一緒に行なうのはなかなか難しいけれど、食事だけは一緒にするというのは、少なくとも日本の家族にはあったような気がするのです。父親が誕生日席にいて、みんなで「いただきます」と手を合わせて、それによって家族が成り立っていた。でも戦後になると、どんどんなくなっていくんですね。いつの頃からか誕生日席に座るのは、父親からテレビに変わりました。そのうちテレビも個室に入ってしまい、食事はバラバラになった。父親は遅い時間にしか帰ってこないし、朝食もみんな別々と

いうのが当たり前になった。食事の仕方の変化が、家族の形を大きく変えたという気がします。

須磨　わたしの家の場合は、可能な限り一緒に食べるようにしていたと思います。そうそう、子どもが中学生や高校生だった頃のことですが、友達を家に連れてきたときでも、家族とともに食事をしていたのです。食事は一緒にするのが当たり前だと思っていましたから。でもあるとき娘から、「あれはウチだけだから」と言われてしまって……。よその家に遊びに行ったときは、子ども部屋で子どもだけで食べて、家族は一緒じゃないと。だから自分の家に呼ぶときは、友達に「覚悟してきてね」と言っていると。すごく驚きました。食卓を囲むことで自然に会話が生まれる……それが大事だと思うし、家族の絆も、食卓をともにし、時間を積み重ねることによってできると思っていたので、時代は変化しているんだと思いましたね。

原島　その変化したあとに生まれてきた子どもたちは、家族全員で食事をした思い出や経験がないかもしれないとすると、家族のイメージが全然違いますよね。家族というのは、単に同じ家にいるというだけ。やはり、食事を一緒にするということを、もう一度復活させることが重要です。これは、日本の産業界に問題があったと思うのです。5時に帰宅する男性を無能扱いしましたから。「24時間働けますか」という宣伝がありましたが、これはつまり、「家庭にいる時間をゼロにできますか」ということですからね。そういうことを、堂々と言っていたんですよね。そこはやっぱり変わらないと。今は変わりつつあるかもしれないけれど、その頃の人たちは、いまだにそれを部下に強要しようとしている。ですから、これからの家族のために産業界がなすべきことは、たくさんあると思いますね。家族の問題は、日本社会そのものが変わっていくこととセットで考えるべきだと思います。

山田　ただ、職種によってそれぞれ環境が違うし、わたしは特殊な職種の家で育ったから特に思うのですが、いろいろな家族がいますよね。一概に一緒に食事をすることを、家族の絆のために外せないことではない気がします。ただ、確かに自分には原体験はないけれど、自分の家族とは一緒に食べたいと思いますね（笑）。

原島　そういえば、先ほどの『想い出づくり』について、あれはご自分の娘さんのことがあったということを聞いて、なるほどと思ったのですが。

山田　ええ、「女とクリスマスケーキは25を過ぎると売れなくなる」なんて、あんなことが当たり前のように言われてはたまらんと、その思いで書きました。

原島　やはり娘さんのことは気になりますか？

山田　その頃は気になりましたけど、今はもう結婚もしているし、特に心配もしていませんね。むしろ向こうが、うちの夫婦を心配してくれています。

原島　ぼくには娘がいないからわからないのですが、父親にとっては家に娘がいると、家族のイメージが違うんじゃないかと思うんです。

山田　どうなんでしょう。それは、いないよりはいたほうがいいと、今は思いますけれどね。やっぱり学校であったこととか、いろいろな話も出ますからね。それはみなさん、やっていらっしゃることだけれど。

須磨　わたし、山田先生のドラマで『岸辺のアルバム』を見たときの衝撃が大きかったんです。一見、普通で平和で、アルバムを見るとすべて幸せな笑顔なのに、その裏に何かを含んでいるというか、見えない部分があって。家族といえども、それぞれに思いがあって、わかりあっているわけでもないという、すごい怖さみたいなものを感じたことを、今でもよく覚えています。好きなドラマはたくさんありましたが、あのドラマは忘れられない。そして、ドラマでも出てきましたが、家が川に流されてしまうように、何が起こるかわからない。だから家族って難しいものですよね、そう考えると。

原島　そうなんです、この難しいテーマの『これからの家族を考える』というシンポジウムは、今回を含めて3年連続で行われます。今日で話題が尽きてしまったらどうしようと思っていたんですが、安心しました。

須磨　語り尽くせないですよね。

原島　語り尽くせない。来年のテーマはどうするか、実はまだ考えていないのです。どういうテーマにしたらいいと思いますか？

須磨　どこを切り口にするかで、展開は全然違ってきますよね。最初、家族の話と伺ったとき、自分のルーツ、血縁ということを考えました。でもペットも家族の一員だということをよく聞

きますが、それは血縁じゃないし、実は夫婦も血縁ではないですよね。家族と血縁の関係がよくわからなくて、だから、まだやっていただきたいテーマが山のようにあります。

原島　それこそ最近は、同性婚とかも含めて家族として考えていく必要があるし、やはりとんでもなく大変なテーマを選んでしまったという気がしています。一方で思うのは、動物の家族。鳥の「オシドリ」が語源で「おしどり夫婦」などと言いますが、「オシドリ」はわれわれがイメージするよい夫婦、家族なのか。われわれの遺伝子そのものは、チンパンジーとそう変わらないですよね。だからチンパンジーの家族はどうなのか。また、人がなぜ家族を大切に思うのかを考えた場合、もしかしたら、人間の遺伝子に家族というものが書き込まれているのかもしれない。だとしたら、それをたどってみるのも面白いなと、そのように、時間をたどってみるのも面白いと思うんですね。ただ、「期待していてください」と言うと、ぼくにとっては辛くなります。勝手に面白がりますので、来年もぜひ来ていただければというふうに思っております。では、だいたい時間になりました。どうもありがとうございました。

パネリスト

須磨 佳津江（キャスター・ジャーナリスト）

東京女子大学卒業後、1972 年日本放送協会（NHK）にアナウンサーとして入局。「スタジオ 102」など、報道番組を中心に担当。1976 年フリーになっても、NHK で「テレマップ」「ニュースの窓」「ラジオジャパン土曜ワイド」「マイコン入門」など担当。特に『趣味の園芸』は、11 年間担当し、花や緑の世界に詳しい。また、オープンガーデンの日本の事情にも詳しく、その効用を日本に広めた人として知られる。2003 年より現在まで、ラジオ深夜便、火曜日のアンカーを務める。別の曜日でも、10 年間、五木寛之さんとの「わが人生の歌語り」「歌の旅人」を担当した。2006 年～東京農業大学客員教授。

（撮影：中村 年孝）

コーディネーター

原島 博（東京大学名誉教授）

1945 年終戦の年に東京で生まれる。2009 年 3 月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人の間のコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心を持ってきた。その一つとして、人の顔にも興味を持ち、1995 年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心を持ち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞（G マーク）審査員なども務めた。現在は東京大学名誉教授、2015 年 12 月より再び特任教授として東京大学に戻り、全学共通の文系・理系を横断した大学院教養講義を担当している。公益財団法人 花王芸術・科学財団　評議員。

公開シンポジウム
「これからの家族を考える」シリーズ第 1 回

発行　公益財団法人 花王芸術・科学財団
〒103-8210　東京都中央区日本橋茅場町 1-14-10（花王ビル内）
Tel：03-3660-7055　Fax：03-3660-7994
編集　公益財団法人 花王芸術・科学財団　事務局
発行日　2017 年 2 月 1 日